



<今年はジルに抱擁を！>ジルベルト・ジル再考 第3回

## ジルの中にあるルーツ・ミュージックを探る



## Músicas que influenciam Gilberto Gil



一体いくつのジャンルの音楽がジルベルト・ジルの身体には染み込んでいるのだろうか？ 60年代、70年代、80年代、90年代00年代と各時代に常にMPBシーンの第一線で活躍してきたジルの音楽は、誰にも数えられない程に多様な音楽からの影響から成立しているのは、異なる時期のジルの作品を数作ピックアップして聞いてもらえれば納得していただけると思うだろう。ただ、ジルはある時期に特定のジャンルにフォーカスを当て活動を行うこともある。ジルの中でも大きな位置を占めているジルの中のルーツ・ミュージックと、ジルとの出会いを取り上げたい。

00年代に入ってから、ジルは『エウ、トウ、エリス』（映画『私の小さな楽園』のサウンドトラック、00年）と『サン・ジョアン・ヴィヴォー！』（01年）という2枚のアルバムを通じて、フォーク回帰を行い、その後には、『カヤンガン・ダヤ・アオ・ヴィーヴォ』（02年）、『カヤンガン・ダヤ・アオ・ヴィーヴォ』（03年）という2枚のアルバムでは、ボブ・マーリー作品を中心にレゲエ・ミュージックを取り上げた。本稿は00年代にジルが重点を置いて紹介した音楽とジルとの関係を記したい。

ジルは楽器を一度持ち替えている。アコーディオンから、ギターへ持ち替えた。ジョアン・ギターを聞いたことが決定的だったそう。その前後のジルに迫ってみるから、ジルのルーツの一端を覗いてみたい。

——何歳までアコーディオンを勉強していたの？

「音楽に繋がるための、唯一の楽器として18、19歳の時まで。19、20歳の時には、ギターを手にしたんだ。ジョアン・ジルベルトが歌い／演奏するのをはじめて聞いたすぐ後だよ。その時まで、ギターに興味はなかった。ジャコウや、ヴァルテル・アゼヴェードとか、ポピュラー音楽に繋がった弦楽器は全部すきだったけど、ジョアンを聞くまでは、そこまで興味はなかった」

「ジョアンのあのスタイルのギターを聞いたとき、アコーディオンやピアノでみんながやるうとしていたことを、ギターで実現していると思った。18、19歳の頃には、だいがアコーディオンが上達していて、一通りのことはできているように思った。セルター・ジャズ音楽や、民俗的な音楽、ゼキニャ・チ・アプレウやエルネスト・ナザレの古典を学んだけれど、そのコンテキストから抜け出す時が来ていたんだ。当時のビッグバンドのサウンドとして、グレン・ミラーの音楽を聞いたたりして、僕はジャズに興味を持ち始めていた」

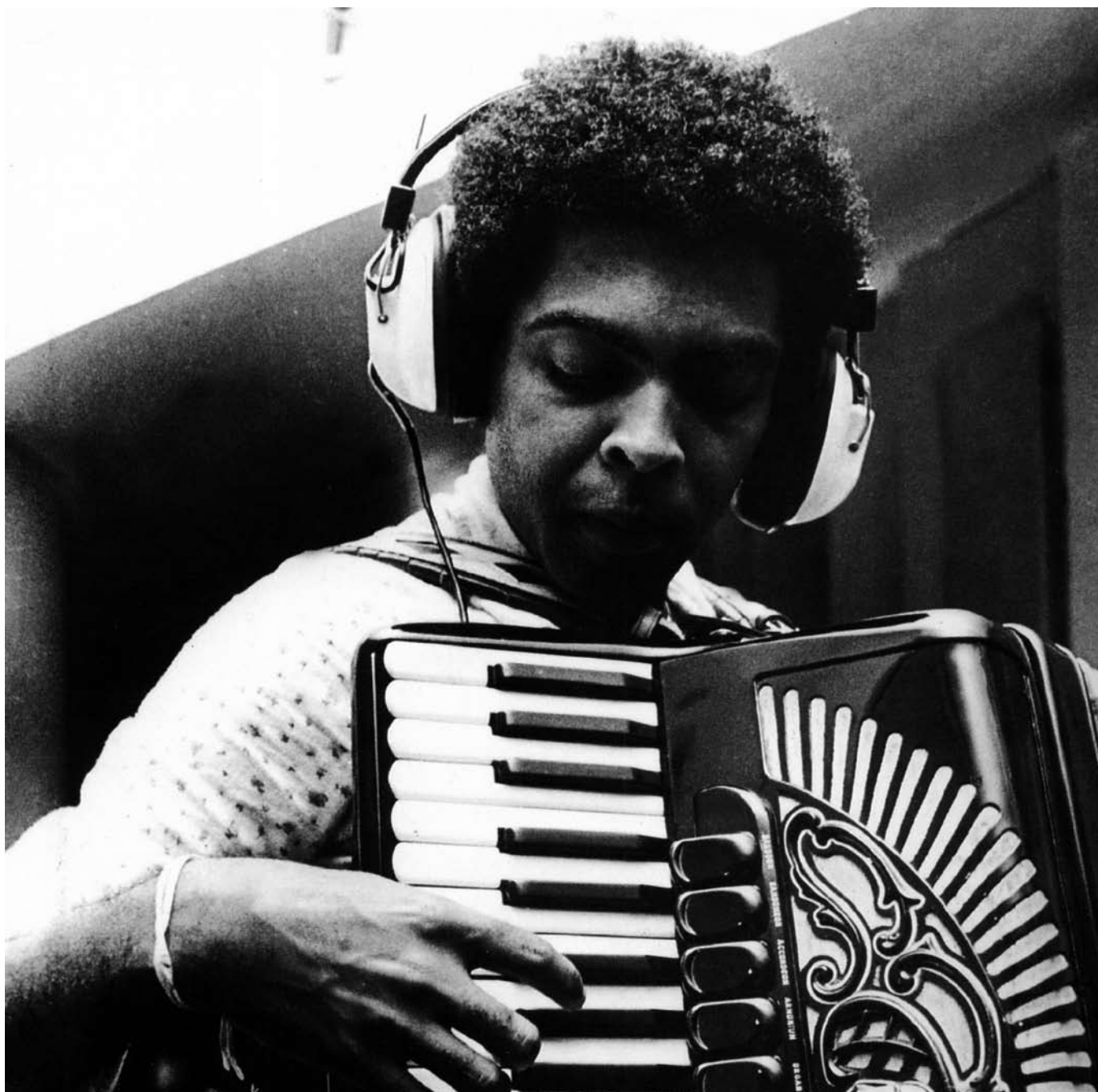
この文脈だけを見ると、ジルにとつてジョアン以前はあまり意味がなかったのではないかという感じがしてしまうが、そうではない。ジョアン以前に随分とアコーディオンを学んだ時期があつて、その時のヒーローはルイス・ゴンザーガだった。そんな時代があるこそ、ジルはトロピカリズム・ヴェメントの復興の対象として、フォークを中心とした北東部の音楽をその1つに取り上げ、また、00～01年に、映画『私の小さな楽園』での音楽担当を発端とした一連のフォーク・プロジェクトに取り組んだ。

ルイス・ゴンザーガからジョアン・ジルベルトへ。ブラジルのポピュラー・ミュージックの中心軸が前述のように動いた時代に、ジルは青年期を過ごした。

「サルヴァドールに引越し」一年間、中学受験のコースで勉強して、試験を受けて、52年に入學した。10歳の時だ。それで同じ年に、アコーディオンの学校にも入學した。母がアコーディオンを買ってくれたんだ。僕は、音楽を勉強することに興味を示していた、アコーディオンは僕の当時の音楽世界の全てに繋がっている楽器だったんだ。つまり、ルイス・ゴンザーガのセルタウンの音楽に、繋がっていた。それに、アコーディオンは大都市でも重要な楽器として注目を浴びはじめてきた。リオ、アカデミア・マスカレニャス、サンパウロ、ペルナンブーコ、サルヴァドールといった都市で変化が起きていた。アコーディオンは、50年代には、60年代にギターが重要だったのと同じく、非常に重要な楽器だった。つまり、都市の中産階級の家で育った青年たちのカルチャーに繋がった楽器であった。アコーディオンは、多くの若者に、音楽をはじめのきっかけや、音楽家として活動をはじめのきっかけを作っていた。それで、この時期

ルイス・ゴンザーガによって決定づけられ





たアコーディオンという楽器の新しい魅力に熱狂的に魅せられて、アコーディオンを学ぶことができないかと母にお願いしたんだ」

ジルはアコーディオンを学ぶが、それとは別に後に音楽学校で音楽理論も学んでいる。「ジルは全く音楽を学ぶことなく自然と音楽を作り始めたのかどうか」という点は、私はずっと気になっていたところだったので、この以下のジルの発言を読んで、腑に落ちるところが大きかった。ジルの作る音楽のメロディーやハーモニーがとても豊かな動き／響きをもっていることが、理論にも裏付けられていることがわかり、すごく腑に落ちた。複雑なコードやコード進行を、楽器を持った途端から、動物的な勘だけで出来たわけではなかったのだ。

——音楽を勉強したの？

「ソルフェージュ（楽譜を中心とした音楽理論を、実際の音に結びつける訓練）の方法なんかを学んだよ」

——どのくらいの期間？

「4年間だよ。だけど、さぼり気味だった。本当のことを言うと、そんなに興味がなかったんだ。僕は音楽をしたかった、音楽にすぐにアクセスできるテクニックを学びたかった。それで、僕の音楽センスにすぐに反映させたかった。当時起っていた音楽カルチャーに密接に関係するような感覚を磨いてくれるような音楽。今まさに生まれているものを生み出したかった。軽妙な芸を身につけたかった。ルイス・ゴンザガのようになりたかった。現代的なハーモニーと密接に繋がっているようなルイス・ゴンザガのような創造力が欲しかった。理論だけとか、古いことには興味が湧かなかった。それで、理論の面でそんなに学校には頼らなかつた。学校はクラシック音楽のことばかりだったから、学校では、ソルフェージュを学んだり、楽譜の書き



## Músicas que influenciam Gilberto Gil



方なんかを教わった。でも、教材は、時代遅れで、古いもので、理論面で学校に興味はなかった」

——その時に作曲するようになったの？

「ええ。ギターを使っただけ。アコーディオンでも、すでにたくさん曲を作っていた。でも、作曲したものと残してはなかった。たくさん即興して、バイアウン、シヨッチを演奏したり、シヨロやサンバを演奏した。でも、自分でもきちんと覚えてもいなかった」

——「これこそが僕自身なんじゃないんだらうか」って思ったりした？

「その通り。そう思って記録しなかったんだから、作曲家のように曲を作ることに、全く興味はなかった。フレーズを作る音楽家に興味があった。それで、ジヨアンをはじめ見た時に、何かを話しているようなスタイルに惹かれた。楽器を弾きながら歌を歌える、歌いながら自分で伴奏をつけられるという人間の可能性をはじめて目の当たりにした。もちろん、ルイス・ゴンザールがその可能性を示していたけど、彼はバンドとコミュニケーションし、開かれた感じだった。ジヨアンの場合は、全く閉じたコミュニケーションの確

やかなスタイルで、やってのけていた。彼は1人の人間に集中するイメージを作り上げた。ルイス・ゴンザールが自分で歌い、伴奏したけれど、こういうイメージを与えなかった。ルイス・ゴンザールは、人気者のイメージ、つまりたくさん集まるフェスタのイメージだ。歌い演奏している時、ルイス・ゴンザールは1人ではなく、周りの多くの人の存在を感じさせた。ジヨアンは全く反対だった。1人の人として、1人の音楽家としての孤独という印象を与えた。それで、創造者としての個人としての孤独という考えを持つようになった。そんな風に思ったのは、はじめだった。そこで、僕の自分の音楽を、自分の曲を自分で作曲した曲、僕のために僕のことを歌った僕が作った歌、もしかしたら他の人にとっての歌、僕という個人に焦点があった歌、そんな歌を持つ必要が出てきたんだ」

——「亡命した直後の」この時、レゲエにすでに興味があったの？

「レゲエが登場したのはもっと後だよ。ロンドンでの初めの年、チエルシーに住んだ。2年目には、ノッティングヒル・ゲートに住んだ。そしてそこで、レゲエに出会ったんだ。それは、ブラジル音楽へ、レゲエが浸透する事情も違ったものになっていただろう。」

——「亡命した直後の」この時、レゲエにすでに興味があったの？

「レゲエが登場したのはもっと後だよ。ロンドンでの初めの年、チエルシーに住んだ。2年目には、ノッティングヒル・ゲートに住んだ。そしてそこで、レゲエに出会ったんだ。

ノッティングヒル・ゲートはまさに、レゲエの震源地だった」

——とても強烈な印象だった？

「いや、レゲエは僕の心を直撃しただけだ」

——ロンドンに住んでいる時、ウッドストック・スタイルの最後のフェスティバルだったワイト島でのフェスティバルに行ったりした？ その中で演奏した？

「カエターノたちと行ったよ。オフでの演奏はした」

——イギリスは、まだ音楽的に豊かな時代にあつたの？

「うん。ビートルズが『アビーロード』を発表して、オノ・ヨーコはジョン・レノンとブラステック・オノ・バンドをはじめ、ローリング・ストーンズは『レット・イット・ブリード』を発表し、トラフィックがいて、クリムが解散して、レッド・ツェッペリンが活動をはじめた、って時期だった。それにブログレスシヴ・ロックが始まった頃で、ジェネシスやキング・クリムゾンもいた。僕は、これらの音楽が、個人的にすごく好きだった」

——彼らのライブを見にいったりした？ おもしろかった？

「行ったよ。さつき名刺を出したアーティストを見るのに、すごく行った」

レゲエ以外にも、ジルは亡命中に多くの音楽を吸収していったことがわかる。エレキ・ギターを使用するようになったのも、亡命した時がはじめてだった。不幸にも亡命せざるを得なかったジルは、幸運にも多くの音楽を吸収して帰国した、こんな風に言えないことはない。

時代を近づけて、00年代のジルの活動に話を戻したい。フォホー回帰、レゲエ回帰の作品発表／ツアーを行った後に、ルーラ大統領の下、文化大臣に任命された。それ以後は、グッと音楽活動の機会は減った。が、唯一大臣になつてから以降に発表したのが、ライヴ録音



の『エレクトロアコースチコ』というアルバムだ。タイトルが「エレクトロ」と「アコースチコ」を合わせた造語であることから分かるように、エレクトロ・ミュージックの技術と、生のライヴ演奏を融合させようということがコンセプトだったこの作品では、オリジナル曲にカヴァー曲を織り交ぜながら、ジルらしい混血音楽を奏でている。ジルが昨年から行っている『パンダ・ラルガ』ツアーも、何か一つのルーツを掘り下げるタイプのコンサートではなく、『エレクトロアコースチコ』路線のジルの混血音楽の魅力を万遍なく披露してくれるスタイルのコンサートだ。本年中に、『パンダ・ラルガ』というスタジオ・アルバムも発表されると聞かすが、キーとなるタイトル曲『パンダ・ラルガ』を、國安真奈さんに訳して頂いた。一足早く「アフリカからインターネットまで」ジルのアイデンティティが表現されたコンサートの中心曲を味わって下さい。

今回のインタビューは、アルミール・シエチアキがジルベルト・ジルの『ソングブック』発刊時に、ジルに行つたものから抜粋しています。」



ジルベルト・ジル作詞作曲『バンド・ラルガ (ブロード・バンド)』 訳：園真奈

Pôs na boca, provou, cuspiu.  
É amargo, não sabe o que perdeu  
Tem o gosto de fêl, raiz amarga

口に入れ、味を見て、吐き出した  
苦い、けれども、何を逃したか分かったもんじゃない  
胆汁、苦い根っこ味がする

Quem não vem no cordel banda larga  
Vai viver sem saber que o mundo é o seu  
Tem um gosto de fêl, raiz amarga  
Quem não vem no cordel da banda larga  
Vai viver sem saber que o mundo é o seu  
Uma banda da banda é umbanda  
Outra banda da banda é cristã  
Outra banda da banda é kabala  
Outra banda da banda é koorao

バンド・ラルガ[ブロード・バンド]の行列にこないやつは  
世界が自分のものだと思わずに終わっちゃうよ  
胆汁、苦い根っこ味がする  
バンド・ラルガ[ブロード・バンド]の行列にこないやつは  
世界が自分のものだと思わずに終わっちゃうよ  
そのバンドのうち、ひとつのバンド[群れ]はウンバンド  
もうひとつはクリスチャン  
別のひとつはカバラ  
あとひとつはクラーン

E então, e então, são quantas bandas?  
Tantas quantas pedir meu coração  
E o meu coração pediu assim só  
Bim-bom, bim-bim-bom, bim-bão

じゃあ、じゃあ、一体いくつの群れがあるんだ  
俺のハートが望む数だけ  
そして、俺のハートはこういう風に望んだんだ  
ピン・ボン、ピン・ボン、ピン・ボン、ピン・ボン...

Todo mundo na ampla discussão  
O neuro-cientista, o economista  
Opinião de alguém que está na pista  
Opinião de alguém fora da lista  
Opinião de alguém que diz não  
Ou se alarga essa banda e a banda anda  
Mais ligeiro pras bandas do sertão

世界が丸ごと広範な議論に付されてるんだ  
神経科学者、経済学者  
注目されてる誰かの意見  
リストから外れてる誰かの意見  
否と言うやつ意見  
あるいは、このバンドが広がって、進んだら  
もっと軽やかに、セルタオンのバンドたちの方へ

Ou então não, não adianta nada  
Banda vai, banda fica abandonada  
Deixada para outra encarnação

もしくは、いや、それじゃ何にもならない  
バンドは進む、バンドは見捨てられる  
別の受内の時がくるまで

Ou então não, não adianta nada  
Uma vai outra fica abandonada  
Os problemas não terão solução  
Piraf, Piraf, Piraf  
Piraf bandalargou-se há pouquinho  
Piraf infoviabilizou  
Os ares do município inteirinho  
Por certo que a medida provocou  
Um certo vento de redemoinho

あるいは、いや、それじゃ何にもならない  
バンドは進む、バンドは見捨てられる  
問題は解決しない  
ピライー、ピライー、ピライー  
ピライーは少しバンド・ラルガ[ブロード・バンド]した  
ピライーは情報化した  
郡部全体の空気を  
この寒が巻き起こしたのは確かだ  
一定のつむじ風を

Diabo do menino agora quer  
Um ipod e um computador novinho  
O certo é que o sertão quer navegar  
No micro do menino internetinho

日頃の子どもは今じゃ  
iPod と新出のパソコンをほしがってる  
セルタオンがサヴィゲートしたがるのは確かだ  
インターネット少年[インテルネットナーニョ]のパソコンで

O Netinho baiano e bom cantor  
Já faz tempo tornou-se um provedor – provedor de acesso  
À grande rede www  
Esse menino ainda vira um sábio  
Contratado do Google, sim senhor  
Diabliu de menino internetinho  
Sozinho vai descobrindo o caminho  
O rádio fez assim com o seu avô  
Rodovia, Hidrovia,  
Ferrovia e agora chegando a infovia  
Pra alegria de todo o interior.  
Meu Brasil, meu Brasil, bem brasileiro  
O You Tube chegando aos seus grotões  
Veredas dos Sertões, Guimarães Rosa  
Ilíadas, Luzíadas, Camões

ネットナーニョはバイアーノで良いシンガーだ  
だいたい前にプロヴァイダになった。アクセス・プロヴァイダに  
巨大な WWW 網  
少年はまだこれから賢人になる  
グーグルに雇われるんですよ  
インターネット少年は  
一人で道を見つけていく  
彼の祖父の時代は、ラジオがそれをした  
ホドヴィア[道路]、イドロヴィア[水路]、フェホヴィア[鉄道]  
そして今度はインフォヴィア[情報の道]が来る  
すべての隣地が喜ぶはず  
俺のブラジル、俺の本当にブラジルらしいブラジル  
YouTube がおまえの溪谷にもやってくる  
セルタオンの細道、ギランマンエス・ホーザ  
イリアス、ルジアダス、カモンエス

Rei Salomão no Alto Solimões  
O pé da planta, a baba da babosa  
Pôs na boca, provou, cuspiu  
É amargo, não sabe o que perdeu  
É amarga a missão, raiz amarga  
Quem vai soltar balão na banda larga  
É alguém que ainda não nasceu  
É amarga a missão, raiz amarga  
Quem vai soltar balão na banda larga  
É alguém que ainda não nasceu...

アルト・ソリモンエスのソロモン王  
植物の芽、アロエの粘液  
口に入れ、味を見て、吐き出した  
苦い、けれども何を逃したか分かったもんじゃない  
使命は苦い、苦い根だ  
バンド・ラルガに火球を飛ばす者は  
まだ生まれていない者  
使命は苦い、苦い根だ  
ブロード・バンドに火球を飛ばす者は  
まだ生まれていない者

※ウンバンド：カソリックにアフリカ起源、先住民起源の  
信仰などが混合してきた  
ブラジルの宗教  
※カバラ：ユダヤ教の伝統に基づいた神秘主義思想  
※クラーン：コーラン  
※セルタオン：ブラジル北東部の半乾燥地帯  
※セルタオンの細道、ギランマンエス・ホーザは20世紀ブラジ  
ルを代表する作家の一人。『グランチ・セルタオン：ヴェレ  
ダス[細道]』は代表作。  
※カモンエス：ホルトガル史上最大の詩人とされる。1570  
年発表の『ウス・ルジアダ  
ス』は代表作。